



町民文芸

只見短歌会 三月詠草

大塚栄一 指導

忘れじとカレンダーにしるしせしもやはりわすれて考へあぐねる

馬場 八智

関谷登美子

ラジオより流るる今日は何の日か聞きつつ我の過ぎ来し思ふ

新国由紀子

古い母の風邪ゆゑ泊まれぬ孫二人朝の挨拶「ばあちゃんとお？」

渡部ゆき子

久々の一人居の友便りには施設に入るも元気の様子

目黒 富子

窓際に止まる小鳥の愛らしさに友との対話しばしとぎるる

渡部ヨリ子

休校で泊まる孫らに夫も入りゲームで遊ぶ午後ひと時

新国 洋子

冷えびえと心に沁むる夜の雨を聞きつつ友に便り書きつぐ

(出詠順)

只見俳句会 四月定例会

目黒十一 指導

百ヶ日忌明けの家や春夕焼
住み古し本家分家の春ともし

恒 夫

ウイルスと戦う日々や春無惨
幼子の春またるる赤き靴

信

子にまじりいつか本気にしゃぼん玉
白じらと山あい朝暖かし

礼

休校のグラウンド広し春嵐
友逝きて子供に戻る彼岸入り

都

だっこ紐に体あづけて木の芽風
手造りのマスクを付けて入園児

一 穂

遊ぶごと屋根をすべりて春の雪
吾子の手に移り香淡き露の花

味代子

戸惑いや妣の冬着を処分せり
雪消えのキャベツの重み手に抱え

修 一

長旅の五羽の燕よ巣にあふれ
春耕の足元に舞うしじみ蝶

弘 子

見る人も無くて終なる花筏
花冷ゆる並木の夜は音もなく

幸 生

